映画『グレン・グールド 天才ピアニストの愛と孤独』

ピアニストとしてのグールドだけでなく、知られざる私生活にも迫っていく本作。音楽だけを愛したのではなく、人との繋がりを求めた姿が描かれていく。あまりその存在を知られていなかったグールドの元恋人の貴重な証言も。㊙ミシェル・オゼ、ピーター・レイモント●10月29日より渋谷アップリンクほか全国公開。

Entertainment Therapy **Close up!**

クラシック界の異端児に迫る!

初めてのグレン・グールド。

クラシック界の異端児グレン・グールド。天才的な技術をもちながら数々のエキセントリックな逸話をもつピアニスト、その魅力を解剖します！

文・構成／大島佑介

50歳の若さでこの世を去ったピアニスト、グレン・グールドが来年没後30年という節目を迎える。そのメモリアルイヤーに先立って映画『グレン・グールド 天才ピアニストの愛と孤独』が公開されるなど、いま改めてグールドが注目を浴びているのだ。

クラシック界の異端児といわれてきたグールドは天才的な演奏技術だけでなく、エキセントリックな言動とその美貌も相まってクラシック界のみならずクラシックを知らなかった人までを魅了してきた。カナダ出身のグールドは1955年に小さなタウンホールでアメリカデビュー。そして同年録音したデビュー盤『バッハ ゴールドベルク変奏曲』で一気にその名が知れ渡ることになる。異様に低いイスに猫背になって座り、歌いながらピアノを弾く姿、独自の解釈による極度に早かったり遅かったりする演奏。だが、そこから生まれる音楽と神がかって動く指に誰もが魅了された。まったくの無名であった彼が一躍時代の寵児として扱われ始めた瞬間だ。しかしわずか10年足らずでコンサートから姿を消し、以後録音されたレコードのみを発表したピアニストなのである。

没後もいまだ映像、本問わずいろいろなメディアで取り上げられるグールド。そのピアニストとしての才能とエキセントリックさはいまだ心を惹き付けるのだ。

グールド入門のための1曲

『バッハ ゴールドベルク変奏曲』

1955年盤

1981年盤

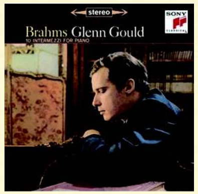
バッハの概念をくつがえす グールド流ゴールドベルク。

映画『羊たちの沈黙』でレクター博士が愛聴し、ドラマ『ロングバケーション』にも登場したのがグールド演奏のこの曲。デビュー時の1955年盤と再録した1981年盤があり、躍動するリズム感で弾く'55年盤に対し、一貫したテンポと弱奏を徹底した'81年盤と聴き比べるとその違いは明らかで、クラシックの楽しさが詰まっている。ちなみに'81年盤はグラミー賞受賞アルバム。（ソニー／各1680円）

『グレン・グールド未来のピアニスト』著者の青柳さんに聞く

グールドの魅力とは?

ピアニストでありエッセイストでもある青柳いづみこさんがグールド本を刊行。そんな青柳さんにオススメのグールドの楽曲から魅力までたっぷり聞きます！



『ブラームス 間奏曲集／4つのバラードより／2つのラプソディ』

19世紀に活躍したドイツの音楽家ブラームスの晩年の作品から間奏曲を集めた1960年に録音されたアルバム。郷愁に満ちたブラームスの曲をグールドが慈しむかのように優しく弾く。（ソニー／1680円）

『バード&ギボンズ 作品集』

16世紀イギリスのエリザベス朝時代に書かれた曲。「もっとも魅力的な曲は16世紀の曲」とグールドが生前語ったように生き生きとした演奏を聞くことができる。（ソニー／2500円）

『グールド・ザルツブルグ・リサイタル 1959』

人前が苦手だったグールドが、ザルツブルグ音楽祭にて弾いた『ゴールドベルク変奏曲』を収録した貴重なライブ音源。生ならではの集中力が伝わってくる完成度の高い演奏が聴ける。（ソニー／2000円）

『バッハ インベンションとシンフォニア』

バッハが自分の息子のために鍵盤の扱い方と作曲の技法の教本として書いた曲。本来、均等を要求する曲なのに対し、グールドが彼独特の即興性を加味しそれが見事なスパイスに。（ソニー／1680円）

『バッハ イタリア協奏曲』

漫画『のだめカンタービレ』にも登場したバッハのなかでも人気の楽曲。強烈に速く躍動感あふれる演奏でバッハを弾く様は、圧巻。まさにグールドの真骨頂である。（ソニー／1680円）

『ベートーヴェン ピアノ協奏曲第3番&シベリウス:交響曲第5番』

20世紀のクラシック界をリードした指揮者カラヤンと共演したアルバム。なかなか共演がうまくいかなかったグールドがカラヤンといかに息があっていたかがわかる素晴らしい演奏。（ソニー／2520円）

最新作『グレン・グールド未来のピアニスト』の執筆中にもその音楽に引き込まれていったという青柳さんにその魅力を語ってもらいます。

元々のイメージはクールで知的、それでいてピアノの音もデジタル的な感じがあったのでちょっとアンドロイドみたいという印象だったんです。ただ執筆中にあまり世に出ていない音源も聞いたんですけど、晩年の音を聞くとカーブを描いたなめらかな音をだすんです。デビューの頃と後で弾き分けている。そういう器用さを持っていて自分の見せ方とかもすごく知っているんですね。デビューのときもそう。エルビス・プレスリーが登場した'56年にデビューしたんですけど、前年にジェームス・ディーンの『エデンの東』が公開されたり、反骨する若者が潮流だったんです。そこに一緒に乗っかったのがグールド。異端児はその当時のカルチャーとしてかっこよかったんですね。グールドもそのことがわかっていた。でも本当に風変わりな人だったみたいで（笑）。コンサートが本当に苦手で終演後も楽屋で震えていたとか、楽譜と違うこと弾くとか。ただピアノ曲以外にもオペラとか交響曲の楽譜も頭の中にすべて詰まっていたとか体操選手並みの柔軟な手を持っていたとか天賦の才があるんです。それにも関わらず10年足らずでレコード発売のみの活動になってしまった。でもメディアでどう扱われるかちゃんと計算が出来ていたのかも。今だったらtwitterとかブログでうまくプロモーションする人になっていたと思いますね。生きる時代が少し早すぎたのかもしれませんね。

『グレン・グールド 未来のピアニスト』

グールドに関する映像や証言、そして秘蔵の音源など膨大な資料をじっくり吟味し書き上げた青柳さんの最新作は、同じピアニストとしての観点から独自の考察を交えて紐解いていく。生い立ちからピアニストとしての変遷や曲の比較まで細かく書かれているのでグールドだけでなく、クラシックを知りたい人にもオススメの一冊。（筑摩書房／2310円）

PROFILE

あおやぎ・いづみこ●ピアニスト・文筆家。フランス国立マルセイユ音楽院を首席で卒業後、東京芸術大学大学院博士課程修了。ピアニストとして数々のリサイタルをおこなう一方、論文『ドビュッシーと世紀末の美学』によりフランス音楽の分野で初の学術博士号を取得するなど多分野で活躍中。